

往々にスパンと与れた混在する。朝は駅から勤め先へ急ぐ人波で歩道が埋まり、お昼時は飲食店に向かう人々が行き交う。登下校時には、制服姿の子どもがはしゃぎ合う。

駅前に、2013年に創立100周年を迎えた上智大学がある。文学部新聞学科の鈴木雄雅教授(64)は、学生時代から足かけ40年以上、この街に通っている。1976年4月に撮影された旧JR駅舎の写真に「ああ、この『みどりの窓口』で切

JR・東京メトロ



新宿区側から撮影したJR四ツ谷駅の旧駅舎。後方に上智大学の校舎や、聖イグナチオ教会などが見える
1976年4月2日、須藤哲也さん撮影



現在の四ツ谷駅は駅ビル「アトリ」と一体化している(左端)。周囲は再開発工事が進み、かつて目を引いた上智大学の校舎(中央)も埋もれたように見える

小児がん経験者が交流

さまざまなお会い、夢語る

小児がんを経験した子どもたちが、同じように小児がんを経験した仲間や先輩と交流する「キャンプ・カレッ

シ2017」が24日、慶応大病院(新宿区)であった。「カレッジ」は英語で「勇氣」の意。小児がん経験者が勇氣

を持って羽ばたくことを願い、同院小児外科と、小児がんの子どもと家族を支援するNPO「シャイン・オン! キッズ」(中央区)が企画した。

冒頭で、進行役を務める横浜市立大医学部3年の小泉亮さんら、がんを経験した大学生

生かして世界を広げて」と励ました。年の近い先輩が生き生きと語る将来の夢を、参加者は真剣に聴き入った。

参加した東久留米市の浦尻一乃さん(16)は

「学校の友だちとはで きない情報交換ができて良かった。また参加したい」と笑顔で話した。慶応大医学部小児外科の黒田達夫教授は「小児がんは治療期間が長く、社会に戻る時

にハードルがある。病気を治して終わりではなく、社会人として生活していく必要がある」と「キャンプ・カレッジ」の意義を説明した。
【谷本仁美】

絵本と動画「I LOVE 練馬あるある」

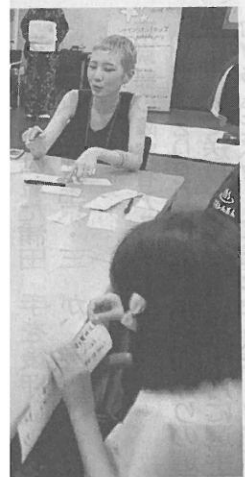
独立70周年に

練馬区が制作

板橋区からの独立70

周年を記念して、練馬区は絵本と動画「I LOVE 練馬あるある」を制作した。「23

区なのに、JRがとおっていない」「いちばんのオススメは?」ってきかれると みんな答えられない」など、



区の慶応大病院で